

大阪大谷大学

令和六年度 入学試験問題（公募制推薦・後期）

国 語

注意事項

- 一 問題用紙は、全部で十二ページです。解答用紙は一枚です。
- 二 解答用紙の所定欄に受験番号と氏名を記入してください。
- 三 解答はすべて解答用紙の所定欄に記入してください。
- 四 問題用紙は持ち帰ってください。



「ノー、スープではありません」

とぼくはすぐに声をあげた。

「これは高野豆腐というもので、ちゃんとした煮ものであります」

通訳嬢は、スープではないと告げた。

「ノー、おいしい、スープ、おいしいスープ」

ウェスカー氏は、スープだといってきかなかった。

### III

おつゆがおいしいというのだろうか。この劇作家の故郷では、この種

のものはスープのだしにするものか。高野のざらついた舌ざわりは、だしガラのイメージであるか。ぼくははなはだ心外で、  
「ここにあるトーフは、そこらにある豆腐ではなく凍み豆腐といい、北国産の、きわめて、酷寒の下でつくられる特殊な技法による貯蔵食品である。したがって、これは、スープとして味をたしなむものではなく、甘辛よろしきを得た味つけによって、豆腐自体にしみこませ、これをシヨウミ<sup>b</sup>するのが本道であって、スープはたんなる煮もの汁にすぎない」

といった意味のことを通訳嬢を通じてしゃべってもらったところ、

「ノーノー、ジスイズスープ」

とウェスカー氏はスープを固持してやまなかった。ご存じのとおり、ウェスカー氏は、名作戯曲をいくつもつ。

### IV

彼の処

女作は「調理場」といい、都会食堂の調理場を舞台全面に現出して、そこで働く、調理係たちの日常と人生を重層性をもって描いて、都会食堂における料理というものが、そのシステムの残酷さによって、調理人たちの生をゆがめてゆく、ユニークな視点がおもしろい作品である。ぼくもこれを木村光一演出の紀伊國屋<sup>きのくにや</sup>ホール上演のを観<sup>み</sup>ていたし、ウェスカー氏が、コック出身の作家でもあることも知っていたけれど、高野豆腐スープ論にだけは<sup>c</sup>フクジュウしかねたのであった。この時の、スープ論争は、英文学者小田島雄志<sup>おだしまゆうし</sup>氏をいたくおもしろがらせ、氏はこの様子をどこかの新聞のコラムで紹介されていた様子だが、誰にどういわれても、ぼくは、高野豆腐をスープガラにしては、生命はあり得ないと信じている。

ウェスカー氏は、しかし、帰りがけに、ぼくが土産にもたせた高野豆腐をしっかりとケースにしるばせ、

「ミスター・ミナカミ、サンキュウ」

② といった。よほど、スープガラがうまかったとみえる。

③ さて、冬場の食膳に、青いものをしのばせるには工夫がいるが、いんげんや、絹さやのあえものはともかくとして、高野豆腐にまぶした春菊か、なすの葉のあえものはおもしろい。さきにもどしておいた高野豆腐を、よく湯で煮て、さめたのをよく絞ってタンザクに細く切り、酢、醤油、砂糖、味噌でひと煮したのをひやし、胡麻油をまぜて、ふりかける。そこへ青菜のゆでたのを、こまかく切つてまぶすのである。色あいはなほだおもしろく、乾物と季節の土がかさなつて、趣向のいい味だと思う。

こういうものも、ぼくは、等持院にいたところに、本孝老師からならつたのだつた。青い菜が少ない季節は、そういうまぶし方で、青を食膳に目立たせるのだ。もちろん、寺院の庭や、藪かげにゆくと、たとえば、かんぞうなどはよく見つかるし、はこべ、なすな、七草はよくのびていた。これらをとつてきて、胡麻にあえたこともあるけれど、量のない時は、高野豆腐にまぶしてつかう料理法はあまりきかないだろう。

妙心寺前管長梶浦逸外師の著書をよんでいたら、老師も、かつては、口やかましい師匠に精進を教わり、とりわけて、大徳寺老師の「金のかからぬ精進」になやまされた苦労話が披瀝されている。

「何も買わないという老師のやり方であるから、畑にあるジャガイモ、葉っぱ等のありあわせのものでやらねばならない。はじめての隠侍の年はこうはゆかなかつたが、習うより慣れよで、隠侍をかさねるたびに上手になつた。そうして第二回目の隠侍になつてからは、れんこん、馬鈴薯、にんじん、大根などのどんな材料でも、その季節のあいだに、ただのいっぺんと同じ形式では絶対にさしあげないという悲願をたてて実行した」

とある。残念なことに、老師は同じ旬において、同じ形式の料理でないものを、つぎつぎと出されたその種目を開陳して下さつていないのだが、ぼくにはそれも、あらかた想像がつくのである。師はちがつても、京都の禅寺の台所と、季節の材料は、いまもそうちがうものではない。④ 畑はつねに古くて新しいものである。そこでこのような開陳がよく呑みこめるのだ。

「たけのこにあえば、たけのこになりきり、松茸にあえば、松茸になりきり、にんじんにあえばにんじんになりきり、馬鈴薯にあえば

馬鈴薯になりきり、大根にあえば大根になりきり、カブラにあえばカブラになりきって、その持ち味を知るとともに、単味では料理にならないから、お互いの持ち味を出しあって、それらが融合して完全な一つの味を出さねばならぬことに気がついた」

「それで品をだき合わせたり、あえてみたり、くずしてみたり、固めてみたり、すりつぶしてみたり、油で揚げてみたり、煮てみたり、焼いてみたり、酢を入れたり、醤油を入れたり、砂糖を入れたり、塩を入れたり、あたかも化学の実験でもやるみたいに、いろいろ配合を工夫した。おかげで、いろいろのご馳走が出来あがって、そのうち自然と味の相性がわかった」

⑤ 自然と味の相性がわかるまでには、相当の年月を要するのである。師匠にけなされ、シカリとばされ、あるいは反対に、Vをうたれ、ほめられて、その日その日の旬の料理をおぼえ、ほめられた味に、またひと工夫をほどこして、文字どおりの精進をかさねるのである。やっぱり、材料も工夫がないと死ぬ。数すくない冬の青菜が、工夫ひとつで、かがやく味となるように。

(水上勉『土を喰う日々 わが精進十二ヵ月』による)

隠侍：老師の身の回りの世話をする者。

馬鈴薯：ジャガイモ。

問一 二重傍線部 a ㄱ e のカタカナを漢字に直せ。

問二 空欄 I ㄱ V に入る最も適当な語句を、次のアㄱエの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

I	ア とつおいつ	イ ひねもすのたり	ウ かまびすしく	エ あれよあれよと
II	ア さしあたって	イ おしはかつて	ウ つきあわせて	エ かねそなえて
III	ア さしずめ	イ もろもろ	ウ はなから	エ またぞろ
IV	ア どうあっても	イ とはいえ	ウ にもまして	エ とりわけて
V	ア 腹だいこ	イ 舌つづみ	ウ 五寸釘 <sup>くぎ</sup>	エ さかねじ

問三 傍線部①「これには、当然異論があつて」とあるが、筆者は、どのような異論があると述べているか。最も適当なものを、次のアㄱエの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 献立を客へ押しつけるのは良くないけれども、何もない場合、こちらの都合を考えることも大事である。
- イ 作者の妻は客に対してこちらの嗜好を押しつけてはいるものの、妻なりの言い分も、認めるべきである。
- ウ 精進の基本は客の嗜好をよく考えることであり、メーカーの都合を押しつけるのは、献立とは呼べない。
- エ 作り手の嗜好を押しつけるのが献立ではなく、本来は、客の色々な嗜好をよく考えて献げるものである。

問四 傍線部②「よほど、スープガラがうまかったとみえる」とあるが、どのような意図が込められているか。最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 高野豆腐よりもスープの方がおいしいとしたウエスカー氏が、高野豆腐を大切そうに持ち帰ったことへの驚き。
- イ 高野豆腐の料理をスープだと主張したウエスカー氏が、実はこれを煮ものだと思っていたことに対する嬉しさ。
- ウ 高野豆腐を料理の主役と認めなかったウエスカー氏が、かえって、これを大切そうに持ち帰ったことへの満足。
- エ 高野豆腐のおいしさを理解できなかったウエスカー氏が、土産として大事そうに持ち帰ったことに対する優越。

問五 傍線部③「冬場の食膳に、青いものをしのばせるには工夫がいる」とあるが、そのような工夫がなぜ必要で、どのような工夫をし、どのような効果を得るのか。本文中の語句を用いて、四十字以内で述べよ。

問六 傍線部④「畑はつねに古くて新しいものである」とは、どのような意味で用いられているか。本文の内容に合致しないものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 畑から取れる材料は、一年を通じて同じとは限らず、季節ごとに量や種類が変化する。
- イ 外から新しい材料を入手するのと異なり、その時々、畑にあるものを使うことになる。
- ウ ある季節の間に手に入る材料には限りがあっても、同じ形式のものには絶対には作らない。
- エ 畑で収穫できる材料は、旬によって異なる一方、時代や場所による変化はさほど無い。

問七 傍線部⑤「自然と味の相性がわかる」とは、どのような事ができるようになることだと、老師は述べているか。本文中の語句を用いて、四十五字以内でまとめよ。

問八 本文全体のテーマとして、最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 青菜のとぼしい時期、客をもてなすための、「ほんとうの精進」を作る知恵
- イ 何もない時、苦心しつつも、「うちにあるもので、間にあわず」ための献立
- ウ 外国人劇作家との、「高野豆腐は、煮ものか、スープ料理か」をめぐる論争
- エ スーパーで何も買わず、畑にあるもので、「金のかからぬ精進」を作る工夫



□ 次の文章を読んで、後の問に答えよ（設問に字数制限がある場合、句読点・符号等はすべて字数に含む）。

今まで、「詭弁<sup>きべん</sup>」という言葉をも、特に定義せずに使ってきた。詭弁は、その使用者に騙<sup>だま</sup>しの意図があることを前提とした言葉なので、通常は、「虚偽<sup>しゆゐ</sup>」や「誤謬<sup>ごみう</sup>」のようなより中立的な用語が使用される。米国の非・形式論理学の学界でも、用いられるのはもっぱら「虚偽・誤謬<sup>しゆゐごみう</sup>」(fallacy)で、「詭弁<sup>きべん</sup>」(sophistry)には滅多にお目にかかることはない。これについては、旧ソ連の論理学者Π・H・フェドセーエフその他も、『論争の技術について』の中で、「虚偽・誤謬<sup>しゆゐごみう</sup>」と「詭弁<sup>きべん</sup>」とを区別することを主張し、次のように書いている。

論争の進行中に、誤った応答と詭弁的応答とを見分けることは、必ずしも単純で容易なことではない。 □ I、相手の応答を明らかかな詭弁だと言って非難するには、それ相応の十分な根拠の存在を前提とすべきであり、単なるギワク<sup>a</sup>や直感的な憶測にもとづいてはならない。特別な証拠を欠くときには、そうした非難は、独断的な理由によるもののように見えてしまう。

真つ当な意見であるが、フェドセーエフらは、いかにも旧ソ連の研究者らしく、この後にこう付け加えている。「詭弁的応答は、しばしば、政治的討論で、ブルジョアの活動家によって用いられる。」これもまた、真つ当な意見かもしれない。「ブルジョアの活動家」よりも「社会主義的活動家」により当てはまることではあるが。

□ II、虚偽(誤謬)と言うにせよ、詭弁と言うにせよ、これらの言葉を正確に定義することは、実はそれほど簡単なことではない。歴史的に様々な言語現象が虚偽(fallacy)と呼ばれ、その屑籠<sup>くずかご</sup>に投げ込まれてきたので、そうしたものに過不足のない統一的な定義を与えることはほとんど不可能であるからだ。米国で出ている『レトリック百科事典』や『レトリックとコンポジション百科事典』のような大部な事典で“Fallacy”の項目を読んでみると、虚偽研究の歴史が、理論的な発展の歴史ではなく、定義の修正史であることを思い知らされる。つまり、ある研究者が fallacy について一つの定義を提唱すると、別の研究者が襲いかかって例外を指摘し、また新たな定義がモサク<sup>b</sup>される——<sup>①</sup>こうしたこと繰り返しなのだ。

最近では、誰にも尻尾しっぽをつかまれないように、できるだけ広い定義が好まれる傾向にあるという。例えば「マクローヒル大学演習」シリーズの『現代論理学』の執筆者たちは、「論証中に現れて論証の適切さを損なう誤り」という広い定義を採用した後、こう開き直っている。「誰にも受け入れられている『誤謬』の定義はない。多くの著者がいま与えた定義よりも狭い定義を用いているが、その著者の実際の語法が本人の定義に反している場合が少なくない。」III、定義とは限定することなのであるから、広い定義などにほとんど意味はない。

<sup>②</sup> こういう次第なので、私は、自分の使う詭弁という言葉について、特別の定義を与えることはしない。読者の常識的な理解にしたがつて読んでいただいで結構である。私の場合、従来虚偽と見なされてきた言語形式を、説得のための技術としてあえて用いるという意味から、詭弁という言葉をやや偽悪的に使用するのであるが、騙しの意図という通常の意味で解釈されてもかまわない。そもそも、「説得する」ことと「騙す」ことの間には、明確な線など引きようもないのであるから。

何よりも、定義には、それを読む人に例外やムジュンムジュンを探させる衝動をもたらす妙な性質があるらしい。だから、私がうっかり詭弁を定義したりなどとすると、全体の論旨などそっちのけで、私の詭弁の用法とその定義とが合わぬ箇所を見つけ出し、鬼のAをとったかのように凱歌がいかを上げたりする。こういうのに付き合うのはうんざりなので、だから、ここでは詭弁の定義も虚偽の定義もしない。

これは、レトリックや論理（論理的思考）など、他の用語についても同様である。どちらの言葉もきわめて歴史が古く、様々な意味に用いられているので、通常、定義という操作で許容される形式と分量によって、そのすべての使われ方を統一するのは不可能なのである。自慢にもならないことだが、私があえてそれらを定義すれば必ず誤るだろう。

だから質たの悪い人は、相手に対する定義の要求を、論争での武器の一つとして使用することがある。論敵の発言から適当な言葉を拾い出し、「あなたは〇〇という言葉をもどのような意味で用いられていますか」「あなたの使っている××という言葉は正確に定義してください」などと要求する。そして、相手が言葉に詰まったり、Bして杜撰ずさんな定義を口走ったりなどとすると、喜び勇んで襲いかかり、その揚げ足を取って勝ち誇るのである。

IV<sup>d</sup>、某文芸評論家が、国語教科書に掲載されている作品について、こんなものは文学ではない、詩ではないと、厳しくヒハンしたことがあった。これに対し、国語教育の関係者で、それならお前の言う「文学」を定義してみろ、「詩」を定義してみろと反論した人がいた。この人は、「文学」や「詩」を定義すれば、ある作品が「文学」であるかどうか、「詩」であるかどうかを明確に区別できるとも思っているのだろうか。要するに、定義を求めれば相手は困るはずだと予想しての、ヨウチな反撃にすぎない。ジャンIIジャック・ロブリューは、こうした定義を「相手を不安にする問い」として、論争での技法の一つに数えている。

言葉の定義や規準の明示を要求することは、それだけを見れば、十分に正当で、論理的な行為である。相手が使った言葉について、その意味や使い方がわからないと言ひ、それについての正確な説明を求める。この行為のどこにも、非難すべきところはない。問題は、こうした正当な定義の要求と、相手を引つ掛けるための定義の要求とが、外見上はまったく区別がつかないことである。邪悪な動機は、もちろん外からは見えず、ただこちらの推測にすぎない。ある意味では、根拠のない決めつけである。しかし私は、議論の流れによって自分がそう感じたのであれば、証拠もなく決めつけてもかまわないと思っている。こちらを混乱させるために定義を求めているのだと思えば、<sup>④</sup>まともに答えず、突き放せばいい。「あなたの使っている○○という言葉は定義せよ」などと詰め寄られたら、木でCをくくるように「あなたの○○の使い方と同じだと思ってくれてかまわない」とでも答えればいいのだ。もし使い方に違いがあれば、それを説明するのは相手の責任になる。

こうしたやり方は、V論理的には邪道で、ルール違反と言われても仕方がない。しかし、論理的であろうとすることが、しばしば正直者が馬鹿を見る結果になる。相手の意図などわからないのだからと、定義の要求に馬鹿正直に応じ、その結果散々に論破されて立ち往生する。いつでも論理的に振る舞おうとするから、論理を悪用する口先だけの人間をのさばらせてしまうのだ。われわれが論理的であるのは、論理的でないことがわれわれにとって不利になるときだけでいい。

(香西秀信『論より詭弁 反論理的思考のすすめ』による)

ソ連：ソビエト社会主義共和国連邦の略称。ロシア連邦やウクライナなどから成った連邦国家で、一九九一年に崩壊した。  
ブルジョア：近代の資本主義社会で、生産手段や資産を有する階層に属している人。  
社会主義：土地・資本などの生産手段を社会全体の共有とし、貧富の差のない社会の実現をめざす思想および運動。

問一 二重傍線部 a と e のカタカナを漢字に直せ。

問二 空欄 [ I ] と [ V ] に入る最も適当な語句を、次のア～オの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ（同じ記号は二度使えない）。

ア しかし                      イ もちろん                      ウ かつて                      エ ところで                      オ それゆえ

問三 空欄 [ A ] と [ C ] に入る最も適当な語句を、次のア～オの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

[ A ]	ア 角	イ 耳	ウ 髪	エ 頭	オ 首
[ B ]	ア 初志貫徹	イ 紆余曲折	ウ 四苦八苦	エ 猪突猛進	オ 一举兩得
[ C ]	ア 足	イ 目	ウ 口	エ 手	オ 鼻

問四 傍線部①「こうしたこと繰り返し」とあるが、これと同様の意味で用いられている語句を、これより前の本文中から、六文字で抜き出せ。

問五 傍線部②「こういう次第」の内容に合致するものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 虚偽の屑籠に入れられた言葉は、意味が消失してしまうため、その統一的な定義はほぼ不可能である。
- イ 著者自身の語法が本人の定義に反している場合が少なくないことから、最近では狭い定義が好まれる。
- ウ 米国で出版されている大部な事典の“Fallacy”の項目からは、虚偽研究についての歴史が読み取れる。
- エ 性格が悪い人間の中には、相手に定義を要求することを、論争における武器として使用する者がいる。

問六 傍線部③「凱歌を上げ」とあるが、この「凱歌を上げる」と同様の意味で用いられている語句を、本文中から四文字で抜き出せ。

問七 傍線部④「まともに答えず、突き放せばいい」とあるが、筆者はなぜそのようなように考えているか。本文中の語句を用いて、七十字以内で答えよ。

問八 この文章の内容に合致するものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 文芸評論家は「文学」と「詩」、それぞれに定義を与えると、それらを明確に区別できると思っている。
- イ 米国の非・形式論理学の学界では、「虚偽・誤謬」よりも「詭弁」の方が、用語としてよく使用される。
- ウ 言葉の定義や規準の明示を要求すること自体は、正当な論理的行為であり、非難すべきところはない。
- エ 根拠のない決めつけは、邪道で非論理的な行為であるため、相手に対する使用を認めるべきではない。